
【無銘】

轟ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【無銘】

【Nコード】

N3286V

【作者名】

轟ちゃん

【あらすじ】

とある町に住む少年。

かなみや
なるみ
神並谷 成海は

中学時代に、名前の無い、「彼等」と呼ばれる。
悪魔に近い存在となる……。――。

壹

昨年、中学三年生の秋、夏の終わり頃に僕は命を救われた。

一人の少女に。

否、救われたのではない。

事実上新たな人生を歩まされたと言うべきか、生き返されたのだが、

生き返った僕は生前の僕ではないから、生まれ変わらされたと言うべきなのだろう。

そんなわけで、それ以来僕にとっては不思議だと思ふことが不思議と思わなくなってしまった。

日常こそ異常。

どこかで聞いた台詞。

人は悪魔の存在を共通してイメージするが、実際にはそのような形をしているとは限らないし、

それを一概に悪魔と呼べるのか僕自身悩みどころだ。

悪魔というのは人の欲ではないかと思ったりもしたが、

そしたら食事も睡眠も悪魔に入ってしまうのではないかと、なかなか当てはまらない。

だから、あの人は悪魔と呼ばず、（彼ら）と複数形なのだろう。判断できないから。

不思議な事といえば昨日も大変なことがあったわけで、今日。

入学式4月7日。

中学生から、なんと高校生になるのです。

今まで15年間よく生きてきた自分を誇りに思った。
たった15年で。

だがしかし。

こんな始まり方をすれば大抵、主人公というのは寝坊するのがお決まりなの（なの？）だが。
ちゃんと、その法則に従って寝坊した。

入学式の日。

ちゃんと寝坊をする、ていうのもおかしい日本語だが。
全力を尽せば間に合わない事もないけれど。

昨日のことがあって、疲れていた。

幼馴染と一緒に入学式に向かう予定だったが、時間がないので先
に行ってもらった。

玄関に鍵を掛け。

自転車に跨り、朝の空気を心地よく感じながらこぎ始める。

1、2年で道路の幅が究極に広がったこの町は、以前とは全く
別の空気が漂っている。

なんていうか、数年前まで田舎臭かったのに今となっちゃあそれ
もいい思い出で、新鮮味を感じる。

本当に変わった。

田んぼなんて見渡す限りだったのに、もう一つも見当たらない。

まあ、強いて言うなら、畑くらいは見えるかな。

全く別の制服を着た男子高校生（？）と並んで信号を待つ。
多分、この制服は仙台西・・・？

制服にはあまり興味を示さないタイプな僕だから、一度見ただけの記憶の中をどうにか探りだした。
きつと的外れだ。

根拠は無いが、自信が無い。

信号が青になったから勿論僕は足に力を入れてこぐ。
左カーブの歩道を自転車を通る。
三つ並ぶマンションを眺めつつ、更なる信号待ちをする。

やばい。

鼻から牛乳出すくらいやばい。

さすがにこんなに信号を待つては時間も時間も。
8時半までに学校に着かなければ、完璧な遅刻。
初っ端から最悪な印象だ。

そんで今と言えば8時7分、全力でこがなきゃ間に合わない。
休み無しだ。

筋肉痛覚悟だ。

なぜなら、僕が今日から通い始める学校は坂の上なのだ。

坂の上の学校。

信号が切り替わり、またもやこぎ始める。全速力で。
気持ちちはチーター、現実には自転車。

僕としてはとても速いのだが、周りから見たら、ただの自転車だ。
建設途中のビルの前を通り、小学校の校庭の前を通り、セブンイレブンの前を通り。

坂に到着。

ギア三段階の内の二段階で勢いよくペダルを踏む。
春とはいえ、制服の中が暑い。

だんだんと汗が滴ってきた。

ペダルをこぐ度、身体全体が暑くなる。
ついには、こぐと前輪がぐらつく程重くなった。
それでも僕はこぐのを止めない。

もう少しだから。

もう少しで駐輪場に着くから。諦めない。

「諦めないで。」と何回も囁かれている気分だ。
そしてついに……………。

ペダルを踏み外しすつ転んだ。
がらがらガツシヤンの文字とインパクトの効果が現れている感じだ。

「いで……………」

脚や腕の関節を痛めたが、制服には大した異常が見られなかった
のが不幸中の幸いだ。

僕は焦りながら下駄箱を通り抜け。

そして、そのまま自分の指定された教室へと向かう。

「やばい、やばい。」

せつかくの高校生活を無駄には出来ない。

無駄に出来ない理由の一つとして、

そりゃまあ、リア充になりたいって願望もあるし、

同じ中学だった奴も結構この学校に通う事になるけれど、あまり仲がよかったわけでもない。

しょっちゅう喧嘩してたとか、そういうのではなく、会話をしなかった、というただそれだけの事だ。

まあ、実際。入学式は始まっておらず。おそらくは、教室で待機しているであろう新入生がこの学校の先生の語りでもせいぜい、聞いて、流している所だろう。

しかし、この学校。

なかなか面白い階段の造りをしている。

螺旋階段もどき？

上りは右カーブ。踊り場のあたりで普通の階段となるが、あとは全部螺旋状。

そこでだ。

オレンジ。

オレンジ色のまん丸が大量に描かれた布を目の当たりにした。

率直に言うと、

螺旋を6段踏んだあたりで、上の方に気配を感じたから。なんとなく見てみると、

丁度、螺旋を下ろうとしている女の子が目に入った、ついにて。

股の間を見てしまったわけで、それに追加して言うとその女の子は、

可愛いというよりかはキレイで、外国混じりな顔で、美人。といった感じだった。

以上、説明終わり。

「きゃ~~~~~。」

彼女は、きゃ~~~~~、と棒読みで、

「はああ。」

最後に呆れた。

壹（後書き）

どうも、轟とんぼちゃんです。

処女作です。

いやはや、読んで頂き真にありがとうございます。

1話は中途半端（？）に終わりましたが、
次話はこの途中から始まります。

説明が多くてつまらないでしょうが、

どうぞ、今後もよろしくお願いします。

貳

非常に今、気まずい空気が漂っている。

絶対笑えるだろうとネタを披露してみたけど観客は誰一人として笑うことはなかった、みたいな。

そんな感じの空気。

その呆れたまま。

ポーズは本当にスカートの裾で股を隠していた。

「何をそんなに見つめているのかしら？」

G i k u . . . 。
しまった。

今の今まで水玉オレンジを凝視していた・・・！
いい感じに股のラインに沿ってピッチリしているのを凝視していた。

あまりの緊張に身体が硬直する、頭の中はA4の白紙だけだ。
どうしよう。

冷静になれ、落ち着け神並谷 成海！！

お前は突如の疑問詞に緊張で答えられない程のc h i c k e n 野郎ではないはずだ！！

この2、0000000345秒くらいで思いついた言葉は

「あ、いやあ、べ、別に何も・・・。」

別に何でもありません。

コツコツ。

彼女はゆっくりとこちらに向かって来る。

コツコツ。

一段一段、丁寧に一定の速さで。

コツコツ。

モデルのような細い足。

コツコツ。

綺麗な黒の長髪が階段を下りる度にゆれ、水玉オレンジとおさらばする。

さようなら、水玉オレンジ。

「ふん。」

なんでもないんだあ。と、思いっきりニヤついて
僕の顔を覗いてくる。

僕を疑っている。

納得したように見せといて。

誤魔化しは無駄だったようだ。

そこだけ微妙に怖かった。

朝の校舎は静か過ぎて逆に不気味だったりする、それが余計に引き立てていた。

「でも、先輩にあいさつがないのは頂けないわ。」

先輩だったんだあ・・・！？

「先輩だったのよ。」

「お、おはようございます……。」「

言っくんなきゃわかんねーよ！

「察しなさい。」「

態度的にそうだろうとは思っていたけれど、納得したくはなかった！！

螺旋の階段に沿って窓ガラスが作られていて、そのガラスから日差しが反射して僕たちの影を作っている

薄く、弱弱しく、僕のポーズをそのままに真似をする。生意気な奴だ。影に言っても仕方ないけれど。

それでも彼女の存在感はとても力強いものだった。

「はあ、まったく、先輩に対するその反骨精神はどうしてあるのかしら。初めて出会ってまだ1分くらいしか経っていないのに。」「

ここまでの仲になったのはあなたのお陰です。

「いい加減パンツから離れて頂戴。」「

汚物でも見るような蔑んだ目でこちらに顔を向ける。

「ところで。」「

「はい。」「

これ以上何があるっていうんだ!!

僕は教室に向かっていただけだし、それに加えて水玉オレンジを見たけだし。

何も悪いことはしていない!

「柄をピンポイントで当ててる時点で私にとっては、それはすごく気分が悪くなる話なのだけれど。」

——名前。

「あ・・・神並谷・・・です。」

下の名前はあえて伏せておいた。

この人の場合、バカにされそうだから。

女の子みたいって。

本当は、神並谷^{かなみや} 成海^{なるみ} 15歳（今年の誕生日を迎えれば16歳）。

簡単にキャラ設定を言わせてもらうなら、髪の毛は割と長め、身長は171cmと平均より小さい、

左手に腕時計、右手には鞆、現在学校指定の制服を装着。

こんな感じ。

至って普通の男子高校生。

まあ、ある事情で髪の毛の色素を失ったりするんだけど、それについては後日話す事になるだろう。

「神並谷君・・・ねえ。」

彼女の目は何かをまだ待っているような目だった。

「あれ、下の名前は？」
何かを待っていた。

「・・・成海です・・・。」

H A H A H A H A H A。
大爆笑でした。

「W W W。」

W W W↑だけは使わないで欲しかった！！

強烈なイメージダウン…この人に対する謎が深まる一方だ。

「面白い名前じゃない。誰が付けたの？」

そこ聞く！？

とりあえず、言ってみた。

「両親のほすですけど・・・。」

「あらそう、ご両親のセンスに感謝なさい。」

他人に関してまで

どこまでも上から目線な女だ？

「ちなみに、私は、志野崎^{しのさき} 流華^{るか}。あなたも名乗ったんだから、私もちやんなのらないとね。」

それを言うなら、あなたから名乗るべきじゃあ？
・・・まあいいや。

とやかく言っても意味はない。

「ああ、あと。」

次はなんだよ。

と、不意にだった。

いきなり、ゾクツとくる何か、オーラと言うべきか、今までの空気が一変する何かが。
僕の耳元で囁いた。

「気づいてない訳じゃあないんだからね。」

その言葉は本当に今までの和やか(?)な空気を変化させ、一気に冷凍させるようだった。

思わず振り返った僕が見たものは。

上りきった6段と奥に見える廊下だけだった。

参（前書き）

ここいらで、幼馴染について話そう。

僕の幼馴染、高校も一緒に教室も同じ。

席までもが隣・・・と言うわけでもなく、2列ぐらい遠くの席だった。

名前は、津々島つつしま夜宵やよい。

小柄で、胸は小さく、髪も短い（短いと言っても、大体肩に掛かるか掛からないかぐらい。）。

成績もなかなか、だがしかしだ。

こいつは悪い奴ではないが、天然と言うべきか。
ドジっこだ。

寝坊、忘れ物、時おり寝癖が残りっぱなしだったり、

大体は

よくあることかな。

それでもこいつは根はいい奴で、色々と世話になっているし、何だかんだで優しいやつなのだ。

参

「天然はひどいよお。」

今現在、夜宵とマクドナルドで飲食中、雑談中。

「ああ、ごめんごめん。」

入学式は3時くらいに終わって、
夜宵と二人でマクドナルドに行く事にした。

店内で食べる事にして、二階の奥の窓側の席に座った。
高層マンションの側面に沿って落ちているオレンジが
今朝のオレンジとはまた別の意味で綺麗だった。

「かなちゃん、何部入るの？」

先に話をふったのは夜宵だった。

かなちゃんとは、勿論、僕の事で、昔からそう呼ばれてたからも
う慣れっただけけど、

高校生にもなったわけだし、正直、そろそろ止めてほしい。

「あ〜ん、まだ決めてないかな。」

「中学校のときみたいに、入ってすぐ止めたりするの、駄目だからね！」

お前は僕の母親か。

まあ実際、世話焼かせる部分はあるんだけどね。

ほんとこいつには、色々と助けてもらった。

金がないときなんかは、料理をご馳走してくれたし。

時々、野菜とかお裾分けしてくれたり。

ちなみに僕はアパートに一人暮らしだ。

下に妹がいて、隣町のおばあちゃんの家に住んでいる。おじい

ちゃんも一緒だ。

父は僕がまだ中学生になる前に事故で死んで、母は僕が中学卒業と共に――。

「んゝそいじゃあ、夜宵、お前は何部に入るんだ？」

「あゝ実際のところ、私も決めてないんだあ。」

「なんだよ。」

「えへへへ」

なぜか照れくさそうに笑う夜宵。

いや、褒めてねえよ!?

ポテトを一本ずつかじりながら話を続ける。

「あ、でも興味ある部活はあるよ!」

「へえ、何部だよ。」

「釣部。」

Ha?

「お前が？」

「お魚さん食べたいな〜って思っで。」

「食うことしか考えてねえのかよ!？」

「あ、鮎とか塩焼きにして食べてみたいな〜、おいしいんだっ
てよ?。」

らしいね。

まあ、鮎の塩焼きなら等の昔に食べてるけれどね。
あれは美味しかった。

優越感に浸る僕がいた。

ハンバーガーシヨップで焼き魚の話とはなかなかシユール。

「・・・釣部がどんな活動するのか知らないけれど、僕らの通う
学校って、釣部あったか？」

「あ・・・・・・・・・・。」

沈黙。

いや、待てよ!!？
そこからお前は…。

これだから。

「お前HP見ろよ。」

「ごめん、機会音痴なんだあわたし。」

「インターネットくらい開けるようになれ。」

機会音痴どころの話じゃねーぞ!？
やっぱりドジだった。

チーズバーガーを一噛み、二噛みしてコーラを飲んだあと
ポテトにかじりながら夜宵との会話を続ける。

「んゝ、釣部ないんだゝ。じゃあ茶道部でいいや。」

「食い物目当ても程々にしろ、てか食い物目当てで部活決めるな
!?!」

「エ!？何で分かったの!？怖い!!」

「怖がるな!わざわざ文字を変換するな!」

「えへへへへ。」

だからなんで照れるんだ？

照れながら夜宵は口の中にポテトを3、4本放り込み、モグモグさせる。

オレンジジュースとともに流し込んで話をさいかいさせた。

「でも和菓子っておいしそうじゃん。今まで和菓子ってあんまり食べたことなかったからさあ。」

「。。。。」

こいつに、食べ物は諦める。なんて言っても無駄なんだろうな。最終的に決めるのはこいつだ。これ以上の口出しはよそう。

「まあ、精々がんばれよ。」

「やった〜〜！！」

親におねだりを粘ってした結果、結局許可を得た子供の如く。夜宵は大喜びだった。

「僕が許可しなかったら、入らない気だったのか？」

「うん、まあね。」

おい、それって何かとまづくないか…。

「なんとなくあくだよ。」

「なんだか知らないけれど、お前の人生、生きる主導権を僕が握

っているみたいじゃないか！」

「んゝそうかな？」

部活ぐらい自分でじっくり考えて決めろよ。
じっくりとな！

「あゝ、料理部もいいな。」

「ああもうあとは勝手にしてくれ。」

「そんな投げ出さないでよ。」

お前の事情だろうが！！って怒鳴りたかった。

こういった感じで、バカトークが繰り広げられ、困っている、
店員が見えた。

—————店を出て、家路へ向かう。

「今更だけどさ。」

夜宵が話をふってきた。

「ん？」

「入学式ってすごくドキドキしたね!」

ほんと今更だね。終わった直後に言うならまだしも、時間経過も考えてモノを言っただけだよ。

「僕はぜんぜんしてなかったけど?」

「え?あ、そう。」

少しだけがつかりしたような顔見せて、夜宵は続ける。

「新しい学校生活が始まるんだなあ、って、わくわくしちゃうよ?私。」

学園ドラマとかでよく言いそうな台詞を言いやがった。

「・・・お疲れ様です・・・。」

「ほえ!?な、なんでお疲れさまなの!?」

「いいやあ、人生楽しんでいるんだなあ、お前は。」

「ああ・・・う、うん。まあねえ。」

えへへっ。

・・・ぶっちゃけ、こいつ笑うと結構かわ——(ry

「・・・お前の笑顔に100点満点中、50点やろっ!」

「へ?」・・・じゅ・・・じゅっ・・・?」

うん、50点。

いいねえ、50点。

良くもないが、悪くもない平均に行く50点。

やっぱどつちかに片寄らず平均がいいんだよ。

平均最高!!

・・・平均最高、てその言葉がすでに片寄ってる気がした。

「平均的な顔なんだ私い・・・。」

夜宵にとって、平均はあまり好ましくないらしい。

若干、目がうるうるしていた。

泣くなよ…。

「いやいやいや、平均はいいぞ?お前、笑顔平均てことは、異様な顔では少なくともないんだからな。」

「そ、そっかあ。うん、平均いいね。私平均極めるよ。」

極めるんだ!?

まあいい、是非とも極めたまえ。

そしていずれ、平均王となるがいいさ。

平均の王ってどんな王なのか、地味に気になる。

「んじゃ、ここいらで。じゃな。」

「うん、ばいばい。」

僕の住んでいるアパートの前で、夜宵と別れた。
真っ暗ではないが少しだけ空が紫がかっている。

ドアを開ける前に夜宵の背中を数秒眺めて、部屋のドアへと向かった。

肆

「つかれた。」

家について、ベッドにねところがる。

さすがに制服はきついから、ちゃんと着替えて、それからねっころがった。

何かと疲れる1日だった。

しかし、何だったのだろう。

——気づいてないわけじゃないんだからね。

その言葉が、妙に引っかった。

まるで、釣竿の針にでも引っ掛けられて刺さっているようだった。

いや、引っかかっているわけではない。

思い返してみると、そう思った。

きっと、僕の存在が気づかれたことに対しての緊張感が、引っかかっているように思えたのだろう。

僕は悪魔、みたいな者だ。

真っ白な悪魔。

純白で濁白の。

気味の悪い悪魔だ。
翼もない、尻尾もない。

きつと、誰も想像がつかない形をしている。
握りこぶし一個分の小さな悪魔。

悪魔がいるなら当然、それを消そうとする者もいるだろう。

きつと、そうなんだ。

あの人は、あの人こそが

エクソシスト
——
祈禱師なんだ。

そう決め付けるのも、どうかと思うけれど。
可能性、としては大だ。

大体、あの状況下でいきなり声を潜めるなんて、そうとしか思えない。
ない。

嫌な感じもしていた。

僕の体内の備え付け悪魔センサーが反応したのだろう。

まあ、あまり深く考えても仕方ない。
入学式と言えど、いろいろと疲れた。

とりあえず眠いので、丸い蛍光灯の電源をオフにして眠りについた。

——起きたのは、それから約三時間経った頃の事で、現在8時過ぎ。

ふああ、とあくびをしたあとに

「喉乾いたあ。」

独り言でしかないことを、わざわざ言つて、玄関を出た。

1人暮らしをしていると、口数が少なくなる。

一人夜道を歩くのは初めてだ。

緊張なんてしないけれど、ちょっとした好奇心はある。

ただ、ここは昼と夜とで車や人の通る数がまったくと言っていいほど異なるから、今はとても不気味だ。

ましてや、路地を照らす電灯でさえまともに点いていない。

ビリビリつと音を立てながら点いたり消えたりを繰り返している。

「~~~~~」

（不気味さを妨げるために）ルンルンしながら、自動販売機の前
に立つ。

数年で田畑が無くなり、今となつてはそこも新築住宅の列が並ぶ、とある一軒家の裏にある空き地の前。

学校帰りはこここの前にある道路を通過する。

空き地と言っても半ば公園みたいなもので、よく小学生が鬼ごっこやサッカー、野球何かをしているのを見かける。

ではさつそく、120円を入れて、ファントのオレンジに指を近づけた。

僕の目的はそこで途絶えた。

なんとなんと、

指を近づけただけで、正確には自動販売機に触れてすらいらないのに、

飲み物が落ちた。

最新の自動販売機は手をかざすだけで飲み物が出てくるのか！？とも思つたが、結局。

紅茶花伝ロイヤルミルクティ（ホット）。

「どうも。」

聞き覚えのある声、今日聞き覚えた声だ。

「ぬぁ！？」

きつと僕はワンピースでいう、ゴッド・エネルギーが驚愕したあの顔をしているのだろう。

あの顔は面白かった。まるまる1ページを使って、本当に笑わせ

てくれた。

僕を隠し撮りするような輩がいるのなら、きっとそいつらも腹を抱えていることだろう。

「何？その反応。まるで、ワンピースでいうゴッド・エネルが驚愕したあの顔じゃない。」

そっくり、そのまま言いやがった。

そう、紅茶花伝ロイヤルミルクティを落としたのは、言うまでもない。

志野崎 流華さんだ。

「ワンピースは良いわね、私のお気に入りはやっぱリエースの奪還ね。正確には奪還できないどころかやられちゃったわけだれど、感動物だったわ。」

語り始めた！？チャンカワイ並みにノリが良いぞ？
Wエンジンは個人的に結構お気に入りだったりする。

「Wエンジンと一緒にしないで。」

彼女はお気に召さないようだった。

「一緒にした覚えはありませんが……。」

「ありがとっ、それでこそ神並谷君ね。」

「そんな単純な存在なんですな、僕。」

「そうでこそ神並谷君ね。」

「ああ、ガラスの心が今にも砕けそう。」

「何を言っているの神並谷君、心はガラスで出来ていないわよ。」

「物の例えですよ。」

「ガラスは心で出来ていないわよ。」

「あなた話聞いてますか!？」

「聞いているか聞いてないかで言うと、聞いているわね。」

「聞いてるんだあ・・・!？」

「私の聴覚を甘く見ないで頂戴。」

「聴覚より、意識的な問題かと・・・。」

「まったく、分からない人ね、両方の意味で。」

「両方教えてください。」

「まず一つは、私の意識がどこかにぶっ飛んでいたとしてもあなたの話はちゃんと聞いていると言う事。」

「・・・それでもう片方は？」

「私があなただを分からないという事。」

「（以下略。）」

僕もあなたが分からない！！

「志野崎 流佳よ。」

「名前は分かります。名前は分かりますけど、あなたが分からない！！」

「分からない事があるならなんでも聞きなさい。」

「家庭教師みたいな事言わないでください！」

「あら、あなたは女教師が好みではなくて？」

そこでなんでメガネを掛ける！？更には、中指で格好つけた風にメガネの位置を直す！？

「先生にちゃんと教えてもらいなさい（heart）。」

「怖い・・・。」

目が怖い・・・。

台詞が強調されてて、ホラー映画とは別の意味で怖かった。

「気を付けなはれや。」

「一緒にされたくない芸人のネタを使うな！！」

方向性の見えない小説だな・・・まったく。

「それにしても、なんでここに？」

「あら、私は気づいたのにあなたは気づかないのね。」

・・・そう言われるとやっぱりそうなんだな、と思う。
お被いされちゃう。

きつと今日で僕の人生終わりだ。

「・・・先輩ってやっぱ、」

——
祈きとうし祷師なんですネ。

「へえ、意外と勘がいいのね。」

僕を不思議そうに見る。
上から目線で。

蔑んだ目で。

「そ、それで何用で？」

「勿論、悪魔被いよ。」

それが当たり前のようにさらっと言う志野崎さん。
自動販売機の前でシリアスな空気が漂う。

夏じゃないから虫はあまり寄り付かないけれど、自動販売機が照らす僕らの顔は少し強張っているだろう。

祈祷師は、むしろ僕からだと思魔のように見えた。

「そう・・・ですか・・・。」

きつと僕の事だろう、と思っていた矢先にだ。
また別の第三者が現れた。

現れて欲しくない、三者が。

「あ、かなちゃん！」

そいつは数メートル先の街灯の下に立っていた。

僕をそう呼ぶのは、幼馴染のあいづぐらいで
無論、今来たのもあいつでこいつだ。

津々島 夜宵。

「あれ、そちらの方は・・・？」

と言いながら、こちらへ歩いて来る夜宵。

「志野崎 流佳よ、あなたの一つ上。先輩って呼んでもよくつて
よ。」

初対面のくせにいきなり態度がデカすぎる先輩だな。
もっ少し華やかに出来なのかな？

「どうも、かなちゃんとは幼馴染の津々島です。よろしくお願いします。」

こいつもこいつで違和感の一つや二つ、感じとらんのかね。

「かなちゃん？」

「はい、私は神並谷君の事をそう呼んでいます。」

「988888888（くはははははははは）。」

何がそんなにおかしい！？

笑ってはいたもののそれは台詞だけで、表情は一切変わらない。
きつと、この人を本気で笑わせられる人はいないのだろう。

「こちらこそよろしく。津々島さん。」

「ところで、今、お取り込み中でした？」

「いえいえ、むしろあなたが来て好都合だったわ。」

嫌な予感。

多分、被魔ふつまをするのは僕だけではない。

そんな気がして、そして本当にそうだったのが、

腸が煮え返りそうだった。

伍（前書き）

何をどうしようと、それはその人のやり方で、それを一概に間違
いだと決め付けるのは、その人の全てを否定しているようで、僕は
あまり好きじゃない。

ただ、それで自分にとって大切な人が失われようならば、き
っと相手が誰であろうと、僕は否定し続ける。

伍

「ぎゃあああああ嗚呼ああああAああああA
A！！！」

一瞬の事だった。

最初からそこにいたみたいに、夜宵の目の前に立っていた。

祈祷師は夜宵の顔に一枚の札を貼り付けた。

否、叩き付けた。

バチンツと痛々しい音が響き渡る。

札が張り付くや否や、白い電気のようなものが夜宵の身体から放出される。

その札が夜宵の中の悪魔的存在を除去しているのだろう。

「だ、大丈夫なんですか！？」

しだいにその白い電気はエスカレートし、夜宵の口、目の隙間、耳、鼻から黒い液体が飛び散るようになった。

夜宵は白眼を向いたまま悲鳴を上げる。

それもまた人間の物なのか。

夜宵の物なのか分からなくなるくらいに、鼓膜が痛くなる奇声だった。

「何を言っているの、大丈夫なわけじゃない。」

・・・？

「それはいつたい、どういう・・・？」

「私は悪魔を抜かないわ。」

またもや、嫌な予感・・・ではなく更なる上をいく気持ちの悪い予感がした。

「私は彼女を」

――殺しているの。

その言葉と同時に、僕の身体が動いた。
駆け出した。

祈禱師ではなく、夜宵のもとへ。

あまり反射神経のいい僕ではないけれど
今の僕は思ってもない程身体が動いた。

なぜなら、

僕は今（彼）と一体化しているのだから。

あの、真っ白な悪魔と。

「あなたがその札に触れても無駄よ。」

「う・・・るっさい!!」

先輩、とは言え今はそれどころじゃない。

僕はなんの躊躇もなく札を、剥がそうとした。

「いででででででででで!!」

勿論、自分にも影響を及ぼす事くらい分かっていた。
僕にも電のよなもの気が伝ってきたけれど、そんなのお構いなしだ。

「あなたバカ？」

「バカでもなんでもいい。外さなきゃ…。」

札は瞬間接着剤でも付いてるのかってくらいに剥がれてくれない。
夜宵の顔が人間ではなくなるようで、恐怖さえおぼえるくらいだ。

「祈祷師が外そうとしない限り外れないわ。」

「は…外してくれ!!」

「何を言っているの？そんなことしないわ。被害が拡大する前に
被魔しないと……。」

「夜宵を死なせたくはない!!」

「犠牲は憑き物よ。」

違う。

何かが違うんだ

そもそもなぜ夜宵を殺す…？

「そもそもあなたとの関わりが原因で。」

…いや、そんなはずない!

僕との関わりが原因ならもつと前から異変が起きているはずだ。
僕が（彼）と結合してから半年過ごしてきて、夜宵自身からはな
んの異常も見られなかった。

さらには。

夜宵の身体からにじみ出る悪運や悪夢は、僕のモノとは一致しな
い。

黒い液体が零れ落ちていくのが見えるが、僕の悪魔は白だ。
真っ白だ。

「これは違う。僕の悪魔じゃあない。」

断言。

「……。」

「お願いだ。外してくれ……。」

最後に情けない声になってしまった。
無力な自分があまりにも情けない。
仕方なくすらない。

ここぞつて時にも、

夜宵に対して何もできないままだ。

「……ふんっ。嫌よ。」

頑固なやつぢゃなあ！。

夜宵の真っ白な目がとうとう真っ黒になってきた。
緊急事態。

電気が弱まってきた。

つまりもう少しで悪魔が消え、夜宵が死ぬ。

「や…ヤバイって！本当に死ぬって！」

札に書いてある訳のわからない文字を睨みながら、
札を掴む。

ぱり…。

夜宵の額から鼻の先端にかけて貼られている札は、
3センチ程額から剥がれた。

電力が弱い分、剥がしやすくなった。

「そ…そんな…悪魔であるあなたにできるはずが…。」

驚きのあまり、祈祷師は力なく腕をぶらつかせ、立っている。

ぱりぱり…と、あともう少しだ。

あと数センチで剥がれる…！

「うぐ…。」

「や…めろお…！」

漠然と見ているだけだった祈祷師が動き出した。
引こうとしている僕の両手を押し戻そうとする。

「はなせ…祈禱師!!」

「ここで外されてたまるか!もうミスは許されない!他人の事など、もう気に止めないと誓ったのだ。」

ミス…?

祈禱師は涙を押さえながら、

「悪魔を必ず殺すと…」

誓ったのだ…。

陸

私の父は祈禱師だった。

父は祈禱師を止めてもずっと悪魔祓いをしてきたそうだが、どんな強敵でも必ず祓う祈禱師だった。

小学5年生の時、父は私に簡単な祓魔を覚えてくれた。護身のためと言って、それから父は次の段階、次の段階、と遂には本格的な指導者が始まった。

指導はキツかった。

なんでここまでやらされているのか分からなかった。

ある日、父が悪魔に憑かれた男の人を部屋に入れた。

一見なんの変てつもないただの男の人だったけれど、中身は全く人間ではなかった。

父が手首を縄で縛り、ソファへ寝かせ、「水」をかけた瞬間。

「ウギイイヤアアアアアアアア！！！」

喉を潰すかのように痛々しい奇声が発せられた。

しまいには訳のわからない言葉を口にし、こちらを睨んでいる。

初めてこんな残酷なものを見た。

小学生がこんなものを見て精神に異常を来さないのか。

私は即座に失神だった。

手は横に、足は開かずピシッとしたまま頭部から倒れた。

その後、父が悪魔を祓い終えた後。

父は私を病院に連れていき、医者に診察してもらった。

異常無し。

頭部を強く打ったが何にも異常は見られなかったそうだった。

それから3年後、中学2年になるまで私は悪魔祓いの指導を受け続けた。

これこそ異常だ。

あんな悪夢を見てもなお、まだ続けているのだ。

本当なら止めるべきだったのに。

人生というのは油断できない。

選択のミスでは、失わないはずの者まで失ってしまう。

中学2年の夏の事だ。

それなりに悪魔を祓えるようになった私は、父に忠告された。

「いくら大事でもそれが悪しきモノと変貌を遂げた時、殺さねばならない。」

その忠告通りやり遂げた私を、彼女は許してくれないだろう。自分も自分を許したくはない。

本当に止めていれば、こんなことにはならなかった。

中学2年の夏休みも残り半分が過ぎようとしている頃。
午後4時。

私は、当時とても仲の良かった友人と仙台から電車で太子堂に向かっていた。

あまり人は乗っておらず不思議なくらい少ない。私達を含め、この車両には3…いつの間にか誰も乗っていない。

仙台と太子堂の間に一つ挟むからきつとみな降りたのだろう

「はあ、今日も疲れたね。」

部活帰りの電車の中。白いMIKASAの中にはバレーボールシューズと膝宛、そして練習で着た黒シャツが詰まっている。

「うん…」

友人、坂田美樹は小さく答えた。

さらさらのセミロングが夕日に照らされ一部がオレンジに染まる。とても美しい印象を与えているのに等の本人からは元気が見られない。

「どうかした？あんまり元気ないようだけど。」

「ちよつと、疲れただけだから。」

彼女はそう言うけれど、明らかに顔色は悪かった。ちよつとじゃ、済まされないくらいに。

「大丈夫？結構辛そうだよ？」

私も焦ってきた。

もしかしたら倒れるのでは？と嫌な予感までした。

「大丈夫だから、安心して。」

だから大丈夫ではないのだ。

徐々に息が荒く……。――。

私は気づいてしまった。

荒いといえどそれは全くといっていい程人間離れた呼吸だった。

「ぐるぢいいいっ!!」

ついには喉元をかきむしるようにもがき始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3286v/>

【無銘】

2011年11月11日19時23分発行